

中国南京市における城壁空間の保全と活用に関する研究

王, 成康

<https://doi.org/10.15017/1441002>

出版情報 : Kyushu University, 2013, 博士 (工学) , 課程博士
バージョン :
権利関係 : Fulltext available.



氏 名 : 王 成康

論文題名 : 中国南京市における城壁空間の保全と活用に関する研究

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

都市の区域を定め、外敵の侵入を防ぐために、中国の多くの都市で城壁が築かれ、城壁都市を形成してきたが、都市の拡大と武器の発達に伴って城壁の存在価値は次第に低下し、文化大革命の旧物破壊運動により城壁の破壊が進んだ。その後、改革開放による経済の成長とともに、中国政府は歴史的環境を重視するようになり、城壁の保全に取り組む都市が見られるようになった。城壁全体を当初の形態に復原する方針をとる都市がある一方で、南京市は都市の発展に伴い、道路や地下鉄を整備するために、城壁の撤去や城門の設置等により城壁の形態を改変し、城壁の周辺環境の整備に取り組み、観光資源としての活用を模索しているが、市民が城壁に自由に立入りできないエリアが発生するなど、城壁と市民との関わりを希薄にしている。そこで、城壁を地域資源として活かしつつ、都市生活の一部としての機能を維持するために、城壁の保全制度を整備するとともに、城壁周辺の都市空間を含む城壁空間として一体的に捉え、都市の発展とのバランスをとることが求められる。

そこで本研究は、現在の中国において残存規模が最大である南京市の城壁及び周辺の都市空間を含む城壁空間を研究対象として、欧州と中国における城壁の保全の実態、城壁都市の類型と南京市の城壁の特徴、南京市における城壁の変遷と利用実態、南京市における城壁の保全に関する法制度と計画の特徴と課題を明らかにするとともに、城壁空間の特徴と現代的役割をふまえた今後の保全と活用の方針を提示することを目的としている。

本論文は、序論、本論及び結論の5つの章により構成されている。

第1章では、序論として、研究の背景、目的、方法について述べ、本研究の意義や枠組みをまとめるとともに、既往研究を整理し、本研究の位置づけを明らかにした。

第2章では、自治体等からの資料提供を得た欧州と中国の48都市を対象として、人口、築造年代、城壁の規模等を整理し、対象とした欧州と中国の城壁都市の多くが11世紀から16世紀にかけて築かれ、中国の城壁都市が欧州より大規模であること等を示した。また、城壁都市の形態、城壁に囲まれた旧市街地の類型、城壁と市街地の隣接関係、城壁の残存パターン等を踏まえ、中小規模全体保全型、高台市街化型、融合型、独立型の4つのタイプに分類し、それぞれの類型の特徴を分析し、城壁都市の形成に関する課題と方針を明らかにするとともに、南京市の城壁は市街地との関係性の弱い独立型であり、城壁空間の地形や土地利用が複雑であること、連続性に欠けること等の特徴を示した。

第3章では、南京市におけるこれまでの城壁の変遷と都市発展の関係性について考察し、南京市の人口増加による市街地の拡大に伴う城壁の増築と新築、城壁の形態と名称の変更、文化大革命時における城壁の破壊、改革開放による城壁の復元等の変遷を明らかにした。つぎに、城壁及び周辺の都市空間により構成される城壁空間を城壁の長さ300mを基準として区分し、各城壁空間の機能、

利用状況、物理的特徴等をデータとするクラスター分析により、城壁空間を未整備隔離型、公園整備一体型、高台視点場型、境界区分型の 4 つのタイプに分類し、それぞれの特徴と今後の保全に関する方針を提示した。さらに、南京市における城壁のシンボル性とゲート性、城壁の内外を眺望する視点場、市民活動の場等の現代的な役割を再評価した上で、城壁空間と周辺との不調和、城壁空間を回遊する動線の不備、観光資源化を目的とした整備が公園整備に偏っていること等の課題を示した。

第 4 章では、南京市における城壁の保全に関する法制度と計画を対象として、まず、城壁の保全に関する法制度の変遷から、城壁の保全と周辺の都市空間との調和および関連性を考慮する空間開発の基準を設定する必要性を示した。つぎに、南京市における城壁保護計画の変遷を考察した上で、国が新たに公布した文物保護工程管理弁法等をもとに、保護計画が部門別計画を含む規範的、総合的な計画に変化したこと、保護対象も遺跡単体のみから自然環境を含む外郭まで拡大したこと、また、環境整備等のハード面から、無形文化遺産の開発や管理組織の設置等のソフト面を重視するようになったこと等を明らかにし、画一的な保全区域と規制区域の設定、整備・開発の制限、文物部門を中心とする保全の仕組み、行政主導による保全計画の策定等のかかえる課題と今後の改善方針を提示した。

最後に第 5 章では、本研究を通じて得られた知見を総括し、本論文の結論とした。